



人間 小沢一郎

一を以て
貫く

Eiji Obshita

大下英治

一を以て
貫く

人間

小沢

一郎

大下英治

一を以って貫く——人間 小沢一郎

1993年10月20日 第1刷発行

著者 大下英治

装幀 山越通子

装画 柳澤達朗

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目12-21 郵便番号112-01

編集部 03-5395-3522

販売部 03-5395-3622

製作部 03-5395-3615

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂



© 大下英治 1993, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは学芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-206405-7 (学2)

一を以って貫く——人間 小沢一郎／目次

序章——

自民党一党支配の終焉
細川政権の誕生

16

8

一部——

一郎という名前

26

三偉人の町・水沢

32

東京へ転校

40

安保の嵐

46

弁護士への道に進進

60

佐重喜の急逝

69

政治家か弁護士か

77

総選挙へ出馬表明

88

田中角栄との邂逅

97

大栗田を席巻

108

トップ当選で最年少代議士誕生

119

華の四十四年当選組

124

田中が父親代わり

138

衝撃の田中逮捕

147

県連会長就任と知事選勝利

157

世代交代に怯える田中

163

総務局長としての正念場

167

数の論理は民主主義の原点

176

薄氷を踏む勝利

185

議院運営委員長に拔擢

198

三部

創政会の設立

210

田中、倒れる

221

初入閣、自治大臣に

229

竹下派の結成

238

皇民党の「ほめ殺し」

246

竹下内閣の官房副長官に

251

官邸主導型政治の重戦車

262

リクルート事件の発覚

274

参議院で与野党逆転

284

海部擁立

291

四部

幹事長就任と党への献金一本化

自民党退潮の流れを阻止

304

与党ボケ、野党ボケを痛撃

羽田孜を政治改革の旗手に

327 312

湾岸戦争の勃発

332

自公民でPKO協力法案が成立

337

竹下派会長代行へ

345

小沢調査会の発足

356

小沢主導の海部退陣

368

小沢擁立工作を拒否

382

三実力者との面談

396

経世会は宮沢支持に

火が吹いた小沢批判

羽田を新会長に推挙

経世会分裂

428

小選挙区制導入から二大政党制へ

417 409 404

取材協力者及び参考文献

448

437

序章

自民党一党支配の終焉

平成五年六月十八日午前十時過ぎ、千代田区紀尾井町にある新生党本部四階の小沢一郎事務所は、異様に緊張した雰囲気包まれていた。

この日午前十一時十五分から、首相の宮沢喜一と羽田派代表の羽田孜との会談が予定されていた。それを前に、羽田孜、小沢一郎、奥田敬和、石井一ら羽田派の幹部が、顔を突き合わせ、その対応を協議していた。

すでに、宮沢をはじめとする自民党執行部は、第二百二十六国会での選挙制度改革法案の成立を断念していた。前日の六月十七日には、社会、公明、民社三党の党首が、政治改革が挫折したことに對する首相の政治責任を問う、宮沢内閣不信任決議案を衆議院議長の下内義雄に提出し、本会議での採決を求めた。羽田派は、それを受けて午後五時十五分に開かれた記者会見で、宮沢内閣不信任決議案に同調する声明を発表した。

宮沢は、国会の会期を延長するか、内閣総辞職か、それとも解散・総選挙か、いずれかの選択を迫られていた。これに對し、自民党幹事長の梶山静六、政調会長の三塚博ら党執行部は、首相官邸で対応を協議した。その結果、解散やむなし、との判断を固めた。が、宮沢は、内閣不信任決議案可決という異常な事態をなんとか避けたかった。そのため、会期の大幅延長で羽田派との調整を進めるよう執行部に求めた。

羽田派の衆議院議員は、三十五人。かれらが賛成にまわれば、自民党は過半数を割り、不信任案

は可決されることになる。二週間後の七月七日には東京サミット（主要先進国首脳会議）が控えていた。宮沢には、議長国の首相としての面子がある。不信任された首相が議長では、国際的な信用にもかかわる。

だが、梶山らは、政治改革の実現を具体的な形で約束しない限り、羽田派が折れることはありえないと判断していた。重い腰をあげようとはしなかった。追い詰められた宮沢は、ついに自分自身から、羽田に会談を申し入れ、急きよ、宮沢―羽田会談がおこなわれることになった。

激論が交わされた末、羽田が決然といいはなった。

「首相とよく話し合い、そのうえで決断しようと思っている」

「政治改革推進議員連盟（改革議連）の事務局長をつとめる石井一が、注文をつけた。

「昨日の総会で、代表に対応を一任することが決まった。最終的な判断は孜ちゃんに任せるよ。でも、とにかく、政治改革は実現しなくてはいいかん。できれば大幅な会期延長を、勝ち取ってきてほしい。大幅にやる、という約束で、不信任案への同調をこらえてくれ、というのなら、それでもいいんじゃないか」

羽田は、ゆっくりとうなずいた。

みんなが部屋から出ていくと、小沢一郎は執務室に入り、椅子に体を深々と埋めた。

羽田派は、国会がはじまった当初から、政治改革関連法案が成立しなければ、自民党を離党するのではないかと見られてきた。が、小沢は、自民党を過半数割れに追い込むだけの数合わせをして、まったく意味のないことだと思っていた。あくまで自民党内にとどまり、選挙制度改革をふくめた政治改革を断行してから、小沢の目標である政界再編を実現させようともくろんでいた。

小沢は、政界再編には、ふたつの方法があるとまわりにいつてきた。

「ひとつは、小選挙区制のもとで選挙をし、どちらかがかならず、過半数を取るようになる。それが、一番スムーズで、短期間に政界を再編でき、無用な混乱も防げる。もうひとつは、われわれが自民党を離党し、中選挙区制のまま選挙をする。自民党は過半数割れとなり、非自民勢力で、過半数を取ることも可能だ。しかし、そういった方法で、政界再編を先行させると、短期間でもう一回、選挙が必要になってくる。時間がかかるし、もじやもじやとした余計なエネルギーを使うことになる。いま、国民は、政治の変革を望んでいる。宮沢さん自身も、それは分かっているだろう」だが、宮沢は政治改革の実現に対して、あいまいな態度をとりつづけてきた。政治の現状、国民の期待を、まったく理解していなかったのである。そればかりか、幹事長の梶山静六は、六月十四日早朝におこなわれた経団連加盟企業幹部の勉強会の席で講演し、「選挙制度は、二年後の参院選で勝利をおさめてから改革する」と述べた。

小沢は、耳を疑った。

「宮沢は、国民に対して政治改革は絶対にやるんです、と断言したではないか。それなのに、まったく動こうとはしない。梶山の発言を聞くと、ふたりで仕組みをついたということになってしまふ。選挙制度改革が、個人的に賛成か反対かは別にして、かれらには政治の状況がまったくわかっていない。これが党執行部の判断だとすれば、政界再編を先行させるしかない」

羽田が首相官邸に到着したのは、予定時刻を七分ほどまわった午前十一時二十二分であった。会談は、午前十二時二十五分に終了した。

羽田は、その足で派閥事務所にもどった。事務所前での記者会見を終え、小沢一郎、奥田敬和、石井一ら幹部の待つ派閥事務所に入った。

羽田の報告を、いまかいまかと待ち受けていた小沢らを前に、羽田はかすかに微笑を浮かべた。

「宮沢さんは、われわれの出した大幅な会期延長の条件を吞んでくれた。予断を許さぬ状況ではあるが、わたしは宮沢さんを信じたい。これから、衆議院議長と会い、野党にも呼びかけてくれるそうだよ」

幹部らは、一様に安堵^{あんど}の表情を浮かべた。

「今国会で法案成立を前提とする会期延長なら、わが派も宮沢内閣を支持できる。これで、自民党離党という最悪の状況は、まぬがれそうだ」

だけれども、そんな気持ちを抱いていた。

だが、そんな期待も、わずか数時間後に、いとも簡単に打ち碎かれることになった。

宮沢―羽田会談を終えた宮沢は、午後一時十五分から衆議院議長の桜内義雄と会談をおこなった。宮沢の野党党首会談の要請を受けた桜内は、ただちに野党の党首に会談を申し入れた。だが、野党は、それを拒否した。しかも、宮沢―羽田会談の終了後、「羽田派は弱腰になった。党を除名されることを恐れ、本会議では、不信任決議案を否決する側にまわったらしいぞ」という噂が、まことしやかに永田町を駆けめぐっていたのである。

これは、守旧派が改革派の分断を狙った意図的な噂であった。

派閥事務所に詰めていた羽田派の幹部が、その噂を伝え聞いたのは、夕刻のことであった。事務所内は、騒然となった。口々に、大声をあげた。

「会期の大幅な延長が前提のはずだ。それについて、まだ明確な回答も返ってきていないのに、いったいどういうことなんだ」

「おれたちの要求を聞き入れもせず、自分らのほしいものだけとるとはな。おれたちは、^{だま}騙し討ちにあつたんじゃないのか……」

「すでに議院運営委員会が開かれ、本会議の開会が決定したらしいぞ」

羽田は、必死の形相で職員に命じた。

「いますぐ、官邸に連絡をとってくれ！」

応対に出たのは、官房副長官の近藤元次であった。羽田は、荒々しくいいはなった。

「これは、いったい、どういうことなんだ！ われわれは、重要な条件を提示しているのにまだに無回答じゃないか。ただ不信任決議案の可決を回避するために、法案の審議を延ばそうとするなら、国民に対して申しわけない。そんな国民を裏切るようなことは、われわれにはできない。断固とした態度でのぞむことになる。そうなくても、いいのか」

普段は温厚な羽田も、顔を真っ赤にして、怒りをあらわにした。

「すぐ、宮沢さんに電話をつないでくれ！」

近藤は、羽田に命じられるまま、宮沢に連絡をとった。羽田は、強い口調で宮沢に訴えた。

「総理、これはどういうことですか！　すでに、議運が開かれ、本会議がセットされてるそうじゃないですか！　わたしが申しあげた政治改革法案に対する明確なご返事も、まだいただいていない。いったい、どういうことですか！」

宮沢は、落ち着きはらった声で答えた。

「いや、それはですね、野党から提出された内閣不信任決議案が、まだ議長のもとにとどまっていますからね。それが、優先的な案件なんです。まず、それから処理しないと、会期の延長を決められません。それに、会期末の二十日でない、会期延長は優先案にはならないですしね」

「総理、本当に不信任案が処理できたら、会期を延長し、政治改革を実現させるおつもりなんですね」

「わたしは、そのつもりでおりますが……」

宮沢と話し終えた羽田は、小沢らにその旨を伝えるや、黙りこくってしまった。石井一は、羽田の心中を察した。

「孜ちゃん、宮沢さんのいうことを、信じるべきかどうかで相当悩んでいる。宮沢さんを信じて、政治改革の実現に賭けるか。あるいは、それを拒否したことで、結果的に政治改革を潰すことにならないかどうか。しかし、どう考えてみても、これは巧妙な罠わなのように思えてならない。党執行部にやる気がないのは明らかだ。それなのに、会期延長をしても、結局は実現しないだろう。そうなれば、一度ならず、二度までも、国民を騙したことになる。しかも、われわれも、それに加担したことになる。いずれにしても、厳しい選択であることはたしかだ……」

この日、午後五時から、羽田派の総会が予定されていた。すでに派閥事務所には、続々と所属議員が集まってきた。が、予定の時刻になっても、総会は開かれなかった。いや、開けなかったのがある。

石井は、ちらりと腕時計に眼を落とした。すでに、時計の針は五時をまわっていた。石井は、羽田に決断をうながした。

「孜ちゃん、最終的にはきみが決断するんだ。派閥の総会でも、一任を受けている。われわれは、それに従うまでだ」

羽田は、これまで見せたことがないほどの厳しい表情でうなずいた。

外務大臣であった渡辺美智雄が、健康問題を理由に辞任したとき、その後任として、羽田が要請された。羽田は、入閣したら政治改革は実現できないとして、それを固辞した。そのときの羽田の表情も、たしかに厳しかった。が、石井には、今回は、その数十倍厳しい表情のように思えた。

「分かった。みんなが待っているから、総会に行こう」

羽田は、さきほどの形相とはうってかわって、さわやかな笑顔でうなずいた。

午後五時過ぎ、ようやく羽田派の総会がはじまった。挨拶に立った代表の羽田孜は、所属議員の顔をぐるりと見まわした。かれらは、いつになく緊張した面持ちで、羽田の眼を見つめ返した。

羽田は、かれらに一礼を送ると、淡々と話しはじめた。

「さきほど総理から、連絡がありました。残念なことですが、われわれの要求に対して、明確な回答をしていただけなかった。われわれの使命は、政治改革を断行し、二大政党制を実現することです。今国会で、関連法案を成立させることです。まもなく、衆議院の本会議が開かれます。そこで、宮沢内閣不信任決議案が採決されます」

羽田は、ここで一拍おいた。さすがに勇気がいったのであろう。額には、うっすらと汗がにじんでいた。羽田は、その汗をぬぐおうともせず、ひととき大きな声を張りあげた。

「われわれは、決然と白票を投じたい！」

白票、つまり不信任決議案に賛成するという意味である。

その瞬間、期せずして万雷の拍手が沸き起こった。ただひとり、二回生の木村守男が発言を求めかけた。が、まわりの議員からただちに止められてしまった。こうして、羽田派は一致団結して、白票を投じることに決まった。

石井は、淡々と話す羽田の姿を見て、胸を熱くした。

羽田は、総会前におこなわれた官邸との激しいやりとり、幹部たちと激論があつたことをおくびにも出さなかった。石井は、羽田の心中を察した。

へおそらく孜ちゃんは、ぎりぎりの段階まで、相当悩んだはずだ。わが派は、一回生、二回生議員